

授業で使える当館所蔵地図

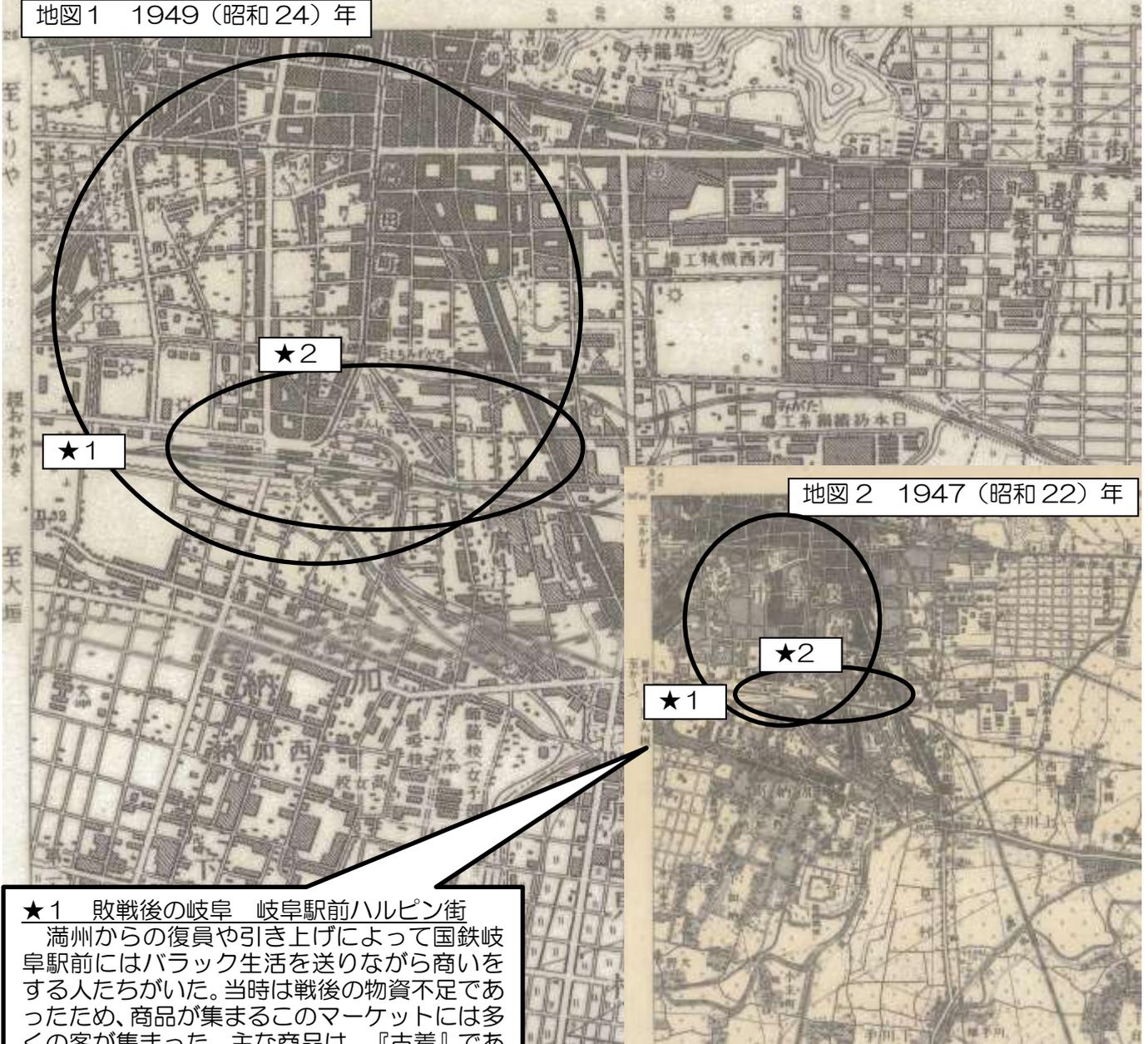
No. 68 地図1『二万五千分一地形圖 岐阜南部』、地図2『二万五千分一地形圖 各務ヶ原』
地図3『25,000の1地形図 岐阜』、地図4『二万分一地形圖 岐阜』

作成年 地図1：1949（昭和24）年、地図2：1947（昭和22）年、地図3：2018（平成30）年、地図4：1910（明治43）年

サイズ 地図1～4：42×52cm

作者 地図1・2：地理調査所、地図3：国土地理院、地図4：大日本帝國陸地測量部

地図1 1949（昭和24）年

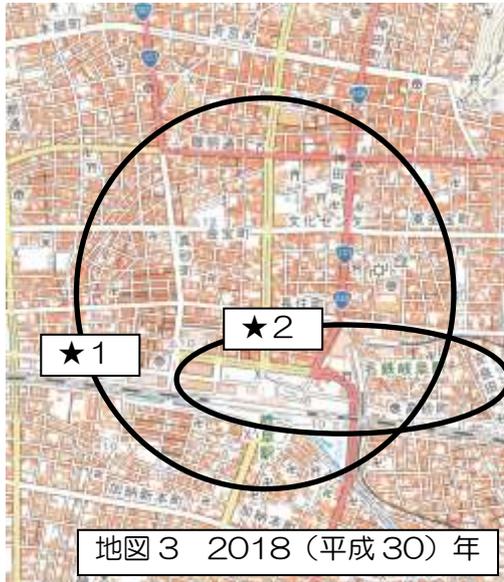


地図2 1947（昭和22）年

★1 敗戦後の岐阜 岐阜駅前ハルピン街

満州からの復員や引き上げによって国鉄岐阜駅前にはバラック生活を送りながら商いをする人たちがいた。当時は戦後の物資不足であったため、商品が集まるこのマーケットには多くの客が集まった。主な商品は、『古着』である。衣料統制下のため古着と偽って新品を売ったり、軍用のテントやシートの布でズボンを作って売ったりもしていた。商売が盛んになると、愛知県一宮市辺りで生地を買い、岐阜市のミシン屋で縫製をしてもらうことで製品としたため、多くの仕事生まれた。商売が安定してくると、商人たちもこの地域に住むようになった。元来、岐阜市は伝統的に織物が盛んであり生地も手に入りやすい地域であった。そのような背景もあり、時代を追うごとに、岐阜市（駅前）はやがて全国からバイヤーが集まる繊維の街となった。こうして、岐阜アパレル産業は大きく発展していった。

【解説】『地図1・2』は地理調査所が作成した縮尺2万5千分の1の地形図である。地理調査所は、1945（昭和20）年に内務省地理調査所として発足した。その後、建設省地理調査所、1960（昭和35）年には現在の国土地理院と改称される。今回の地図は敗戦直後の岐阜の様子を探究するために1949年と1947年の地図を活用した。また、そこからさらに過去の明治時代へ、現代の岐阜の様子へ目を向けることで、JR岐阜駅周辺の土地利用の変遷が確認でき、社会科のみならず様々な授業で活用できると考える。



地図3 2018 (平成30)年

【利用の例】

○自ら学び、自ら考える力を育成することができる。

→中学校社会科 地理的分野「日本の様々な地域」・歴史的分野「第二次世界大戦と人類への惨禍」・公民的分野「現代社会と私たち」～「私たちと国際社会の諸課題」や、総合的な学習の時間で活用できる。

①4枚の地図を「戦後」・「明治」・「現在」の順に提示し、生徒が各地図を比較して疑問に思ったことや興味を持ったことを出し合い、「問い」を作る。

②生徒が作った「問い」について調査をする時間（授業内または家庭学習）を設定し、調査時間を確保する。

③調査終了後、生徒同士が対話形式で「問い」について交流を行い、設定した「問い」の解決を行う。



地図4 1910 (明治43)年

★1・2 約100年前の岐阜
岐阜市中心街の南進・交通網の発達

岐阜町は明治初期、長良川沿いの一角だけの小さなもので、町はずれへ移ってきた県庁（メディアコスモス周辺）は町外であった。そのため、今町に賑わいが集中していた。しかしながら、明治20年、東海道線が開通すると、従来、長良川にたよっていた貨客はしだいに鉄道輸送に移っていった。従って岐阜町の重点は長良川から岐阜駅に向かい、盛り場が南進していくことになった。地理的な要因を考えると、長良川が大川筋なので街は北へ発展することができず、南へ延びるしかなかったことも原因だと考えられる。明治22年、岐阜市が成立したころは伊奈波通り・白木町が中心で、やがて中心は県庁・市役所に近い今小町・神田町一丁目あたりへ変わっていく。明治の末、岐阜・美濃町間に電車が通じ、市内電車も動き始めると次第に柳ヶ瀬にも中心街の陽があたり始めることになる。

参考文献：『岐阜県の歴史シリーズ 図説 岐阜の歴史』 吉岡 勲著 郷土出版社刊
『岐阜県戦後50年世相史 1945～1995』 岐阜新聞・岐阜放送
『ふるさとの想い出 写真集 明治・大正・昭和 岐阜』 国書刊行会